

「物ぐさ精神」でゆこうじゃあねえか

本年度、東筑摩塩尻教育会会長となりました、塩尻東小学校の名取充と申します。微力ではありますが、「つながろ！学ぼう！高めあおう！」を合い言葉に、会員の皆様のみならず、東筑摩塩尻の全教職員の皆様にとって、よき仲間作り、繋がり作りの場としての教育会活動になりますよう、努力してまいりたいと思います。また、皆様からのご意見ご要望を吸い上げ、さらに身近な教育会になるよう考えていきたいと思っています。よろしくお願いします。

昨年、東筑摩塩尻教育会は140周年を迎えました。その記念すべき年の総集会で、元塩筑教育会長青柳直良先生に「東筑摩塩尻教育会と物ぐさ太郎像」と題して、教育会館前庭にある物ぐさ太郎像について、ご講演いただきました。聞かれた方も多いかと思います。この青柳先生のお話は、平成24年から行われた「教育懇談会」で毎年、塩筑教育会の歴史と伝統をわかりやすくご講演いただき、昨年発刊した記念誌「東筑摩塩尻教育会百四十年の軌跡 信州教育の真髄を示す」にまとめられています。信州教育史を研究されている青柳先生が懇談会の中で、毎年人物や活動などをテーマに、塩筑教育の歴史について、先人がどのように考え、どのような願いを持って教育活動を進めてきたのか、ご講演いただきました。記念誌は、その内容をまとめてあります。全講演を拝聴した方は少ないかと思いますが。私も数回しか聞いておりません。しかし、この記念誌を読むことで塩筑教育会の歴史と伝統を、少しでも理解することができると思います。

さて、物ぐさ精神とは何でしょう。大正13年度から12年間に渡って塩筑教育会長を務めた手塚縫蔵先生は、物ぐさ太郎を愛し、会員にはいつも「物ぐさ精神でゆこうじゃあねえか」と説いていたそうです。そして、ある会員が「先生の言われる物ぐさ精神とは何ですか」との質問に、「磨けば光ることさ」と答えています。目の前にいる子どもたちは育ってきた環境はみな違い、外見はもちろん考え方も違います。そうした子どもたちが一つの教室の中で、時に同じ学習問題・学習課題に取り組みながら、少しでも成長したい、伸びたいと思っています。そういう子どもたちを私たち教師はどう磨き、力をつけていけばよいのでしょうか。元塩筑教育会長桐原義司先生は「たとえ頭が悪くても、手は不器用でも、あてになる人、信をおける人、のろまでも信のおける人、スポーツに負けても信のおける人。これがいわゆる人格主義であるといえる」と言っています。目の前の子どもたち一人ひとりに寄り添い、今できる愛情をたっぷり注ぐ。そして茫々漠々としておおらかに包み込む教育を目指していく。青柳先生のお話を聞き、本を読み、改めて塩筑の子どもたちのために、頑張りたいと思うようになりました。

本年度も多くの皆様の、より一層のご協力と参画・参加をお願いするとともに、「自ら求め、共に磨き合う塩筑教育会」を目指していきましょう。